

大阪日々新聞

二百五十
二号



元千日の地内小生人形の見世
物場を角三亥一月一日初日

より大入火繁目恰も甘さ
つく蟻の如く臭き集る蠅の
ごころ其入形大江山酒

童子の
話を次第

或百物語
遊い等を模せり

白を客體笑ふ

生る多如く活動する

有声を發する汗とさ

がせり細入へ廣嶋住

人中合書まへゆる妙工の

世に出るうとむ屋の花のものを

浄水の亀の甲小浦島が七世の孫にり人

よりも逢がとめや実か前代未聞の大當り

別して二日子の日五日初卯兩日ハ五千余

人の見物をも二袋の木た袋一日ハ百田余

を得ると浪花の繁昌之を知べ

夕なほとままご娘のめいびるもあはれさう

よらまきりり

柳櫻記



花菱

